

Jūn zǐ hé ér bù tóng
君 子 和 而 不 同

君子は和して同ぜず 〈子路第十三〉

桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄



私たちがよく耳にする諺に「三人寄れば文殊の知恵」というのがあります。『論語』にも「三人行，必有我師焉（Sān rén xíng, bì yǒu wǒ shī yān）」（三人行けば、必ず我が師有り）〈述而第七〉という言葉があり、両者は一見似ているようですが、やや違った意味合いを持っています。この後に続くのは「擇其善者，而從之，其不善者而改之（Zé qí shàn zhě, ér cóng zhī, qí bù shàn zhě, ér gǎi zhī）」（其の善なる者を択んで之に従い、其の不善なる者は之を改む）です。

ここで言う「三人」とは実数ではなく、世間の多くの人々という意味です。この世界にはいろいろな人がいる。良い人もいれば、悪い人もいる。良い人に出逢ったら見習えばいいし、悪い人なら反省材料にすればよい。「人の振り見てわが振り直せ」という諺がこれに当たります。人に対する好悪の感情にとらわれることなく、何よりもまず自分を磨け、という意味にもとれます。では、人のことはどうでもよい。自分だけが向上すればそれでよい、ということなのでしょう。『論語』全体を見渡すと、必ずしもそうとは言えないようです。

孔子は、乱れた世の風潮を武力以外の方法で正すため、自分に対しても他人に対しても妥協を許さない、堅い意志の持ち主でした。いわば孤高の人という形容が当てはまりそうな人でしたが、同時に、独善的であることを嫌った人です。次のようにも言っています。「徳不孤。必有邻（Dé bù gū bì yǒu lín）」（徳は孤ならず。必ず隣あり）〈里仁第四〉。仁徳というものは、決して孤立したものではない。まわりには必ず理解者がいるものだ、と。その言葉通り、孔子は世間と隔絶することをしなかった人でもありました。

そのことは次の言葉にも表れています。「鳥兽不可与同群，吾非斯人之徒与，而谁与（Niǎo shòu bù kě yǔ

tóng qún, wú fēi sī rén zhī tú yǔ, ér shuí yǔ)」（鳥獸は与に群を同じくすべからず。吾は斯の人の徒と与にするに非ずして、誰と与にかせん）〈微子第十八〉。鳥や獸と一緒に暮らすわけにはいかない。この世界の諸々の輩と共に生きないで、誰と共に生きるといえるのか。世の流れに妥協はしないが、世捨て人にはなりたくない。これが孔子の基本的な考えでした。

また、次のようにも言っています。「君子和而不同，小人同而不和（Jūn zǐ hé ér bù tóng, xiǎo rén tóng ér bù hé)」（君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず）〈子路第十三〉。君子とは人の上に立つ人、もしくはそれにふさわしい人格の持ち主のことです。今風に言えば、理想の管理職像ということでしょうか。そういう人は誰とでも調和するが、相手に同質性を求めることはしない。一方、度量の狭い小人は相手に同質性を求めたがり、異質なものと調和することができない。

この言葉には、2500年前の人の言葉とは思えない新鮮な響きがあります。時代を超えて、現代に生きる私たちにも、そのまま当てはまりそうです。たいいてい人は他人に対して自分との同質性を求めたがります。これは誰もが持つ自己防衛本能と言ってもよいでしょう。同時に、相手に異質なものを感じ取ると、反発し排他的になりがちです。しかしこれでは自分が生き辛くなるばかりです。人間関係もギクシャクしてきます。

同質性を求める自分の心に歯止めをかけ、相手の異質性を認めた上で調和して生きる知恵を持つこと、これは人間関係のみならず、国家間、民族間、異文化間についても言えることではないでしょうか。

（わりい「中国語で読む漢詩の会」講師）